仙台教区報

発行所 カトリック仙台司教区事務所
980 仙台市本町一丁目2番12号
電話〇二二-22-七三七一番
編集・発行人　首藤　正義

マザー・テレサ来仙
ともに『祈る』ことを強調！

神の愛の宣教者マザー・テレサが11月21日仙台を訪れた。来日は今回で3度目であるが、東京以北の訪問は仙台が初めてであった。

午前中、元寺小路教会で400人の信徒と共にミサに与り、のち白百合での「マザーを囲む会」に出席、午後2時から仙台市体育館で八千人の市民を前に講演した。

当日は聖母奉献の祝日にあたり、ミサの最後に挨拶に立ったマザーは、仙台での第一声を次のように語った。

「ともに祈る機会を与えられたことを神様に感謝します。特に今日は神の母であるマリア様の祝日にあたっていますので、美しい清い心のマリア様に一緒に祈ることができたことは本当にうれしいことです。マリア様の心はイエズス・キリスト様に満たされた美しい清い心です。私たちの心もマリア様の心になるようにお祈りしました。特に貧しい人の中におられる主にお仕えすることのできる愛する心、清い心がいただけるように、マリア様に祈りました。

福音書には、「神はこの世を愛するがためにひとり子を世に遣わした」とあります。神のひとり子が私たち人間と同じになった。私たちを深く愛するために。なんとすばらしいことでしょう。イエズス様でいっぱいになったマリア様は今日もあなたのところに、私のところに訪れて下さる。

イエズス様はまだ生れないうちから一家を祝福なさった。母の胎内にいる胎児が他の胎児を祝福なさった。そして祝福された胎児が救い主を告げ知らせるものになった。なんとすばらしい、不思議なことでしょう。

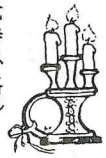
私たちもマリア様と同じようにイエズス様を受けました。イエズス様が与えて下さる喜びを悟ることができますように。喜びをもって生きましょう。なぜならキリストをいただいているのですから。キリストを皆に分けましょう。イエズス様をもたらすとき、人々を喜ばせることができるに違いありません。

愛をもって生きましょう。愛はともに祈ることによって持つことができます。家族で一緒に祈りましょう。子供に祈りを教えましょう。一緒に祈る家庭は心がはなれることはありません。祈りましょう」。

主のご降誕祭と新年
おめでとうございます。

神は独り子を
世に遣わされました。
それは、わたしたちが、
彼を通して
生きるためです。
ここに神の愛が
わたしたちに
現われたのです。
（一ヨハネ4・9）

司教日程
（12月12日現在）



1月1日　新年の平和ミサ（元寺小路）
6日　修道名の祝い・新年会（元寺小路）
7～8日　カリタス・ジャパン仕事始（東京）
9日　人権福祉委員会（東京）
10日　常任司教委員会（東京）
14日　教区司祭団役員会（仙台）
16日　社会福祉法人理事・評議員懇談会（仙台）
24日　カリタス・ジャパン事務局（東京）
28日　教区司祭団月例会（仙台）
31日　男女修道会合同役員会（東京）
2月4日　教区司祭団役員会（仙台）

30周年と新園舎祝別式

八戸・ファチマ幼稚園

去る11月23日、八戸市鮫町のファチマ幼稚園（園長・渡辺昭一師）で、新園舎祝別式と創立30周年記念式典が行われた。

好天に恵まれた当日102人の園児が父兄と共に新園舎祝別式にあずかった。記念式典の中で、内科と歯科の園医二人に感謝状と記念品が贈られ、歴代の園長並びにかつての職員23人も集まり、和やかな祝賀会となった。当日の参加者は160人であった。

あいさつに立った総代理の斎藤石雄師は、幼児教育の重要性、そして教会の幼稚園として宗教教育に力を入れる必要性を熱をこめて語った。

カリスマ東北大会に出席して

オタワ愛徳修道女会
sr熊谷 みわ子

「キリストの愛われらに迫れり」というメインテーマのもとに、第七回カリスマ東北大会が11月23日から25日まで、仙台の茂庭荘で開催された。このたびの大会は、老若男女160人と、大勢の子どもたちが共に祈り、主を賛美する3日間であった。

この集まりにおいて、神と出会い、人々との出会いの喜びを分かち合いたいと思い、ペンをとった。

はじめの日、一人のガン末期の患者さんがミサに参加した。彼女は肺ガンで非常に浅い呼吸をしているが、苦痛の表情は見られなかった。彼女は「わたしは今生きているのではなく、神から生かされているのです。だからそのことを神に感謝したいために来ました」と、小さな酸素ボンベをバッグに入れて、仙台の北の端から南の端まで。

わたしの考えはすぐに職業的役割に転じて、なにもここまで来なくても、家で静かに祈っていても神への感謝ができるのに……と次の瞬間、彼女のキラキラしているまなざしに出会った。静かにほほえんでいるあの顔。主を信ずる人にとっては主のことばは正しく、そのみ業は真実であることを彼女は全身で表わしているのだと知った。

あらゆる時に主を祝せよ、主への賛美はいつも私の口にある。私の魂は主において誇る。共に主をたたえよう。共にそのみ名をあがめようと、目を輝かせ、肩で呼吸をしながら、最後までミサにあずかられた。彼女を見送りながら、「主のみ顔を仰ぎ見られる日はいつか」と待ち望む、彼女の信仰の深さと神へのゆるぎない信頼、そして神への愛が彼女を共に祈る集いまでかりたてたのだろうと深く心を打たれたのであった。

「主のおん目は、主をおそれる者の上に、その愛を待ち望む者の上にある」。

これこそ神への賛美であり、人々への証しであるのだと思い、又、主のことばは正しく、そのみ業は真実であることを証明してくれた彼女の信仰であり、私の心をゆさぶった最初の出会いのひとときであった。

体験学習＝その三

フィリピン

バギオに着いて五日目のことでした。雨が降ったので開墾作業ができなくなり、農協で野菜の包装作業を手伝うことになりました。僕は一人の男性（40代）についてネギの包装作業をしました。彼は一言も発しないで黙々と作業をしていました。僕も同じように、作業を続けました。作業を終えて一息入れた時、「オレは日本人が嫌いなんだ」と彼は言った。僕はどう受けとめてよいかわからず戸惑っていると彼は続けた。「戦争で両親は日本人に殺され、家族は路頭に迷った」。僕は日本人として恥ずかしくて言葉が無かった。そんな僕に彼は話してくれた。「でも、お前は黙って一生懸命オレの仕事を手伝ってくれた。日本人にお前みたいなヤツがいるなんて知らなかった。ありがとう」。

本当にうれしい出来事でした。小さなことであっても、誠意をもって共に作業をした時、たとえ言葉は交わさずとも、人と人とが近くなり、先入観すら変えられることを知った体験学習であった。

（氏家 和仁）

ブラジルを訪ねて

東仙台　長井　和子

梅雨の初め日本をたち、アメリカ旅行を続けて真夏のような暑い冬のサンパウロに降りた。四年振りに見る街は懐かしく、そして美しかった。高く林立するビルの谷間は紙屑ゴミの山、物乞をする人の列、リベルダーデの橋の上は最も多かった。交差点ではバケツとローラを持った子供達が車に群がり、一杯のスープを得るために働く。これが四年前のセントロの状況だった。ブラジル経済は最悪化の極に達している。街から姿を消したあの子供達は、あの人の群は、一体どこに行ったのだろうか。

ブラジルの大自然は、どこに行っても美しい。この壮大な美しさの中に抑圧され、貧しさに苦しみ、土地を職を追われた人の、体を売りながらかろうじて子供を養う女達の悲しみのうめきが、真っ青な大空の下でどよめいている。

四年前の統計によれば、80％の下層階級（宣教師もここに位している）、15％の上流者、5％の最上級者階級（日本の中産階級はない）と分けられている。日本を初め先進諸国の大企業の進出はこの国の経済悪化に拍車をかけている。東南アジアでも同じように、第三世界の人々を苦しめているのは私たち一人一人の責任でもあり、この人たちの重荷を背負うのは私たちでなければならないことを痛感する。

日本では考えられない程の金持の社会、一年中のエネルギーのすべてをぶつけ合うカーニバル、外国人が観光地にあふれるのもブラジルであり、80％の大部分が大都会の裏街・山の斜面のファベラにへばりつき生きている。北部は大洪水、南はセッカ、世界一を誇るサンパウロのバスターミナルには、車が着く度に手荷物を下げた人々がはき出され、物乞をし、又犬猫のように追い払われる。ドロボーやかっぱらいが横行する。これもブラジルの真の姿である。

光と影のコントラストの中で、人々はそこに住み、神も又共に住みたもう。そこには輝く愛があり、神の限りない、いつくしみとあわれみとがみちあふれている。

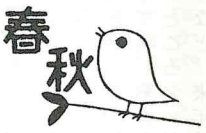
・研修会＝福音宣教について……

日　時　1月29日9時～31日4時
場　所　光ケ丘研修所
指導者　ラベル修道士（ラ・サール会）
対　象　司祭・修道者・カテキスタ
※信徒の方であずかりたい方は首藤までご連絡下さい。
費　用　一万円
締切日　1月15日

マザー・テレサへの活動援助献金

来仙記念講演の折、マザーの活動を援助しようと寄せられた献金の総額は左記の額にのぼり、それは11月24日、全額マザーのもとに送金された。

元寺小路教会ミサ中献金	四三五、一〇二円
講演会場献金	四七一、九一三円
その他の献金	二〇三、八七九円
合　計	五、三五〇、八九四円



「日本の中の貧しい人、それは食うに困っている人ではないかも知れない。愛されないで寂しいと感じている人、誰からも必要とされていないと感じている貧しい人があなたの身の周りにいないでしょうか。声をかけておあげなさい。手を触れておあげなさい」。来仙のマザー・テレサの言葉である。

一九八四年が終ろうとしている今、一つのことが思い出される。

月に何度か、病人見舞のため病院を訪ずれることがある。Yさんは高齢で、一年近く入院生活を続けている。発病以来口がきけなくなったが、家族の手厚い看病でいつも安らかな表情をしている。他に高齢者が3人同室していた。

ある日、隣の人が盛んにベッドのワクをガチャガチャさせていた。どうしたのかとYさんの家族に尋ねると、誰も訪ねてくる人がいなくて寂しいんですよ、とのことであった。Yさんを見舞ってのち隣の人の側に寄り、手をしっかりにぎり、声をかけた。すると、「ありがとう」ということばがそのおじいちゃんから返ってきた。ひとは皆、愛を必要とする存在。病気その他の理由で苦しんでいる時はなおさらのこと。

（狼河原）

おらが教会

(49)

岩手・大船渡教会

人口4万弱の小さい市であり、災害に度々見舞われ、その度に形を変えてきており、現在は都会の縮図のような街。ところが、大船渡に進出してきたある会社の社長さんに、「眠っているような街だ」と言われ、ハッとしました。

中小企業や零細企業が多く、産業、経済面で非常に不安定、その上交通の便が悪く、本線筋から孤立した立地条件にあり、不便な事ばかり。でも自慢出来るものもあります。碁石海岸の眺めは本当にすばらしく、まだ見ていない人々にはぜひ見ていただきたい絶景です。又、遠くに五葉山を眺め、気候温暖で住み易さ抜群の街でもあります。

初代の神父様はベトレヘム宣教会のガイッセル神父様。現在地に教会を建てるにあたって大変御苦労なさいました。当時神父様と御一緒に苦労を背負われた方の中に、仙台に転出なさった山浦金子さん御一家がいらっしゃいます。当時は、神父様や伝道士の渡辺さんを助けて、私たち信者や未信者はいろいろな仕事を手伝わされました。週二、三回教会に出かけ、聖書研究会のポスター描き、日曜学校の手伝いなどもしました。

夏になると、神父様に引き連れられて海に行くのですが、神父様と一緒に歩くと町の人から変な目で見られるので、ずうーっと後からついて行ったものです。

うっ苔とした小高い岩の上が整地され、異国的な建物が建ち、その上、典形的なヨーロッパ人が出入りする様子を人々は異様な目で眺めておりました。30年も前の事です。

チリ地震の忘れることの出来ないあの大津波の時はアロイジオ神父様。リヤカーにカトリック教会と書いた幟を立てて救援物資を満載し、町じゅうに皆で配布して歩きました。アロイジオ神父様は母国スイスから援助金を頂き、被災者のために、町の数か所に「憩の家」を建て、市に寄贈されました。現在その建物は地区ごとの公民館として、今だに利用されており大変喜ばれています。

お聖堂献堂より二、三年遅れて出来た幼稚園（海の星幼稚園）も最初は園児15名でしたが、一時期200名程にもなり、現在は130名。宣教の場として一役買っております。

当教会は、転出がはげしく、受洗する方が出ると両手を上げて喜ぶのですが、半年か一年で他の教会へ転出されます。フィリピンの船が木材などを積んで入港しようものなら、聖堂は船員さんで一杯になり、途端に国際色豊かなミサに早変り、H・シュトレーベル神父様は英語で説明なさいます。

仏教徒の多いこの地方に、少ない信徒数でありながら大きな力で支え育てて下さった神様に感謝するばかりです。30年過ぎた今では、「大船渡カトリック教会」という言葉も定着しました。10年程前から、2年に一度バザーを開き、市民に喜ばれています。又、市の歳末助け合いチャリティーショーに神父様も出演し、スイスの歌を御披露して拍手喝さいをあびたり。

3年前からは、市内にある三つの教会（ハリストス正教会、教団、カトリック）が合同で市民クリスマスを開催し、青年達は合同で劇を、三教会学校も一緒に聖劇（御降誕劇）を。今年は婦人部も共同でミニチャリティーバザーを当日会場で開きます。市民にクリスマスを正しく理解してもらうことが目的です。

教会の年齢と共に周りに植えた木々も大地にどっかり根をおろしました。丘に立って広い心で私達をみ守ってくださる聖母像と、岩の上に建つ教会の十字架を眺める時、信仰を持った者の喜びを強く感じます。

恵まれた環境の中で神様の大きな愛に包まれ、神父様の御指導のもとに、私達は今、大船渡の街が、人々が、キリストの愛の中に群れ集う日のことを想い頑張っているのです。

（佐藤 アサ）

【編集後記】 教区報の編集に6月号からたずさわり、なんとか12月号までこぎつけました。これもひとえに各地の広報担当者並びに読者の協力によるものです、感謝。それにしても、教会を担当しながらの編集作業は実のところシンドイ。特に原稿が集まらないときなど。来年は牛年。ゆっくりでも、着実に原稿が集まることを祈る。（首）